The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	意味論的内在主義の擁護に向けて ： 指示の概念の検討
Author(s)	仲宗根, 勝仁
Citation	メタフュシカ. 2016, 47, p. 35-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59477
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

意味論的内在主義の擁護に向けて*
――指示の概念の検討――

仲宗根勝仁

はじめに

言葉の意味は人の内的状態によって説明されると主張する意味論的内在主義（semantic internalism）[1] は、多くの哲学者から批判を受ける一方、擁護する言語学者も多い。この対立は、研究のアプローチの違いに端を発しているように思われる。フレーゲやラッセルから始まる言語哲学はそもそも、言葉と世界の関係を明らかにする（あるいは言語の考察を通して世界のあり方を明らかにする）ことを主な目的としてきた。それに対して言語学は、膨大な言語的データを基に、言語そのものがどのように機能するかを研究する。言語学的研究は、言葉と世界の関係を明らかにするのではなく、多義性を生み出す言語の構造の明示化、どのような語彙カテゴリーがありそれらがどのように機能するかなどを明らかにするのである。内在主義者にとって意味論は、言葉―世界関係（word-world relation）を担保するための理論ではない、という意味で言語哲学の伝統に反し、言葉―言葉関係（word-word relation）を扱う分野である、という意味で言語学者の研究手法と親和的である。

内在主義者は、世界が存在することを意味論内部に組み込む必要がないと主張する。この見解は一見すると極端な立場に思え、内在主義は世界の存在を否定するおかしな立場だと感じるかもしれない。しかし、内在主義はそのように単に棄却すべき立場ではない。内在主義を積極的に擁護するチョムスキーは、言語学を心理学の一分野とみなし、方法論的に内在主義を擁護している[2]。ピエトロスキやコリンズなどの後継者たちも同様の方法論のもとに言語についての哲学的研究を続けている。

---

* 本論文は、日本学術振興会科学研究費補助金の助成を受けて行った研究成果の一つである。（課題番号：15J00278）

1 以下、文脈から判断できる場合は単に「内在主義」と表記する。意味論的外在主義も同様。

2 Chomsky（2000）においてチョムスキーは内在主義の包括的な擁護を展開している。

■文献

Bernstein, R. (2010) *The Pragmatic Turn,* Polity Press

Brandom, R. (1994) *Making It Explicit: Reasoning, Representing, & Discursive Commitment,* Harvard University Press **(MIE)**

Brandom, R. (1996 (2000)) "Vocabulary of Pragmatism: Synthesizing Naturalism and Historicism" in RHC

Brandom, R. (2000) *Articulating Reasons: An Introduction toInferentialism*, Harvard University Press **(AR)**

Brandom, R. (2000) *Rorty and His Critics*, ed. Brandom, Blackwell Publishing, 2000 **(RHC)**

Brandom, R. (2008) "Response" in *Philosophical Topics* vol.36, no.2, pp.135-155

Davidson, D. (1974) "On the very Idea of a Conceptual Scheme" in *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford University Press, 1984

Quine, W.V.O. (1953) "Two dogmas of empiricism" in *From logical point of view*, Harvard University Press

Rorty, R. (1979) *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press **(PMN)**

Rorty, R. (1989) *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press **(CIS)**

Rorty, R, (2000) "Response to Brandom" in RHC

Rorty, R. (2007) *Philosophy as Cultural Politics*, Cambridge University Press

Sellars, W. (1997 (1956)) *Empiricism and the Philosophy of Mind* (with an Introduction by Richard Rorty and a Study Guide by Robert Brandom), Harvard University Press **(EPM)**

Williamson, T. (2004) "Past the Linguistic Turn?", in *The Future for Philosophy*, ed. Leiter, B., Oxford: Clarendon Press, pp.106-128

野家啓一（2015）「「反自然主義」としてのプラグマティズム」（『現代思想 2015 年 7 月号』），青土社

内在主義は、言語哲学の伝統もあり、その分野では十分に顧みられてこなかった。しかし言語学と言語哲学の接続が試みられるにつれて、内在主義を擁護する議論が増えつつある。本稿の目的は、内在主義は擁護するに値する立場であり、意味論的外在主義（semantic externalism）の立場からの批判は説得的でないことを示すことである。従って、本稿の方針は、外在主義を批判するのではなく、「内在主義は反直観的である」ということを示す議論に応答する、というものである。本稿の議論は次のように進む。第一に、内在主義についての予備的考察を行う。第二に、内在主義に対する批判を検討し、それらが説得的でないことを示す。第三に、意味論的内在主義の持つ二つの帰結を示す。一つは、指示の概念がポスト意味論的概念に属することであり、もう一つは、意味論に懐疑論を論駁する力はないことである。なお、以下では前理論的な意味での意味については単に「意味」という語を用いるが、意味を理論的な概念として考える際には「意味論的値（semantic value）」という語を用いることにする。

１．意味論的内在主義についての予備的考察

内在主義は、パトナムに抗して、「意味は頭の中にある」というテーゼを擁護する。このテーゼについて本節では、次の二つのテーゼをもとに考察する。

（i）意味はある種の心的状態である。

（ii）意味は、言葉―世界関係によって明らかにされる概念ではない。[3]

１－１．心的状態

意味がある種の内的状態であるとはどういうことか。この問いに対して直接的に答えることは現時点ではできない。意味は最終的には脳の物理的機能によって説明し尽くされるかもしれないし、「心」という理論的措定物を消去せずに残すべきかもしれない。しかしいずれにせよ内在主義は、言語をある種の心理現象として捉えることから始める。本稿では、特定の哲学的立場に立つことなく、「内的状態」や「心的状態」を中立的な仕方で用いることにする。

１－２．言葉―世界関係 vs 言葉―言葉関係、多義性

外在主義の中心的な意味論的概念は「指示」である。外在主義において、名前や指標詞の意味論的値はその語が指示する対象であり、自然種名の意味論的値は種である。このシンプルな特徴はしかしトリヴィアルなものではない。外在主義によれば、語と対象の間には実質的な意味論的関係がある。例えば、「アインシュタイン」という名前は、現実に存在した人物アインシュタインを意味論的値として持つ語であり、「水」という自然種語は、H_2O という組成の物質をその意

[3] 本稿では問題にならないが、（i）と（ii）は相互に関係していても同値ではない。もし（ii）が偽であり、意味は言葉―世界関係によって明らかにされねばならないとしても、（i）が真だと主張することはありうる。例えば、Burge（1993）を参照。バージは、心理学的状態がそもそも外在的な事物を含む状態であり、従って外延が異なればその心理学的状態も異なると主張する。この立場に対する批判は、Wikforss（2009）を参照。また、（ii）が真であっても（i）は偽でありうる。意味が虚構の産物だという見解がその一例である。

味論的値として持つ語である。語と外的事物との指示の関係が、先にも言及した「言葉―世界関係」、あるいは「意味論的関係」である。

このような関係が「実質的」なのは、その関係が経験的なものだからである。「水」を例にとろう。外在主義によれば、科学的発見によって明らかになった化学組成 H_2O は、「水」の意味にとって構成的（constitutive）である。さらに、これは認識論的な主張ではない。この意味での外在主義によれば、水の化学的組成を知らない人でさえ、「水」によって H_2O を意味している。というのも、語の指示対象は一般の話者としての個人の知識に依存せずに決まっており、その指示対象がその語の意味だからである。

それに対して内在主義によれば、意味論の目的は語と対象の関係を明らかにすることではない。意味論に要求されるのは、句や文などの複合表現がどのように合成され、合成の仕方に応じてどのように句や文の意味が変わるのかや、様々な語彙がどのように機能するのか、などの解明である。合成性について確認しておこう。合成性は、主に統語論的性質だが、同時に意味論的に重要な性質でもある。というのも、合成性から多義性が生まれうるからである。例えば、

（1）太郎と花子の母親は公園にいる。

という文は、太郎と、花子の母親の二人が公園にいるという解釈と、太郎と花子の母親が一人で公園にいるという二つの解釈がありえ、それに応じて（1）の意味が変わる。意味論の研究とは、統語論の研究とともに、多義性が生まれるメカニズムの解明を目的の一つとしている。

１－３．言語習得、言語能力、意味の基礎付け

本稿での内在主義は、言語習得の問題や、「語が何かを意味する」ことがいかなる事実に基づくのか、という意味の基礎付けについての立場ではない。本稿では、言語習得や意味の基礎づけについての問題を「メタ意味論的問題」と呼ぶことにする[4]。メタ意味論的な要因には外在的なものが含まれる、という主張は本稿での内在主義と整合的である。例えば、言語の習得は外在的存在としての他者を必要としており、従って内在主義は破たんしている、という批判は成立しない。本稿の焦点は、すでに言語を習得した者が理解している意味がどのようであるかの描写である。私が使用してきた「意味論（semantics, semantic theory）」はその描写を目的とする理論である。意味そのものについての理論だけでなく、言語習得や意味の基礎付けなどのメタ意味論的観点や他のレベルの理論をも含めた意味についての統一的な理論は、「意味の理論（theory of meaning）」と呼ぶことにしよう。第 2 節では、外在主義からの批判のいくつかは、この区別を行わないことで生じていることを確認する。

---

[4] Stalnaker（1997, 2001）の区別を参考にしている。なお、以下では「ポスト意味論」という用語もメタ意味論とは別の意味で用いる。メタ意味論は、人が何かを意味することを可能にするのは何によるのか、人がどのように言語を獲得するのか、という意味論以前の問題を扱う分野であり、ポスト意味論は意味論の後に現れる諸現象（指示や真理、字義通りではない語用論的情報の付与など）を説明する分野である。

１－４．直観的正当化

私たちは、様々な文を理解する時に、文を構成している語が実際に何らかの対象を指示している、ということを前提としない。私たちが「太郎は走る」などの例文における「太郎」を理解する際、「太郎は本当に対象を指示しているだろうか」などと考える必要は無い。私たちがその例文を理解するには、「太郎」という語が文の中で「太郎」と呼ばれる行為の主体を表すものとして機能すると知っているだけで良い（名前についての述語主義的見解と考えてもよい）。指標詞も同様に説明することができる。電車の中やカフェでの会話において、「彼」という語が使われている時、「彼」が実際のところ誰を指すのかを知ることなしに、「彼」という語がどのように機能するのかを知っている。内在主義は、ある語によって実際に何が指示されているのかについて言語習得者が無知だとしても、もしその語の使い方を習得しているなら、その語を用いた文を理解することができる。そのように理解されるところの意味が意味論の研究対象なのだ。

１－５．理論的正当化

近年の指標詞の研究を手掛かりに、内在主義の理論的な正当化もしておこう。内在主義の核となる主張は、「指示」は意味論的概念ではない、というものである。この主張は、指示的表現は対象を意味論的値として持つというカプラン的枠組みに深刻な問題を提起した、サントリオの議論によって強化することができる。

サントリオは、「私」や他の指標詞の意味論的値は指示対象ではなく変項である、という議論を展開した[5]。まずは次のような状況を想定してみよう。

> ルドルフ・リンゲンスとグスタフ・ラウベンは誘拐されている。リンゲンスとラウベンは記憶喪失症である。彼らはどちらも二人の記憶喪失者のうちの一人であることは知っているが、自分がどちらなのかは知らない。彼らは次のような実験を受ける。彼らに麻酔をかけ、それからコインをトスする。結果が裏なら、リンゲンスはスタンフォードの中央図書館で解放され、ラウベンは殺される。結果が表なら、ラウベンがハーバードのワイドナー記念図書館で解放され、リンゲンスが殺される。リンゲンスとラウベンはその計画を告げられ、その実験は実行された。彼らのうちどちらかがある図書館で目を覚ました。彼は次の（2）と（3）を発話した。
>
> （2）もしコインが裏なら、私はスタンフォードの中央図書館にいる。
> （3）もしコインが表なら、私はハーバードのワイドナー記念図書館にいる。[6]

（2）と（3）は同時に発話できる（しかも真なる）文である。さてここで、リンゲンスが生き残ったと仮定する。カプラン的意味論によれば、「私」の意味論的値は現実の文脈に依拠した指示対象であり、従って「私」の指示対象は常にリンゲンスでなければならない。しかしこれは（2）

5　彼の指標詞の議論については Santorio（2010, 2012）を参照。
6　Santorio（2010）, p.291. 本稿の議論に合わせて文の番号を変更している。本稿で引用している他の例も同様である。

と（3）の正しい解釈を不可能にする。カプラン的な意味論によれば、（2）と（3）は次のように解釈される。

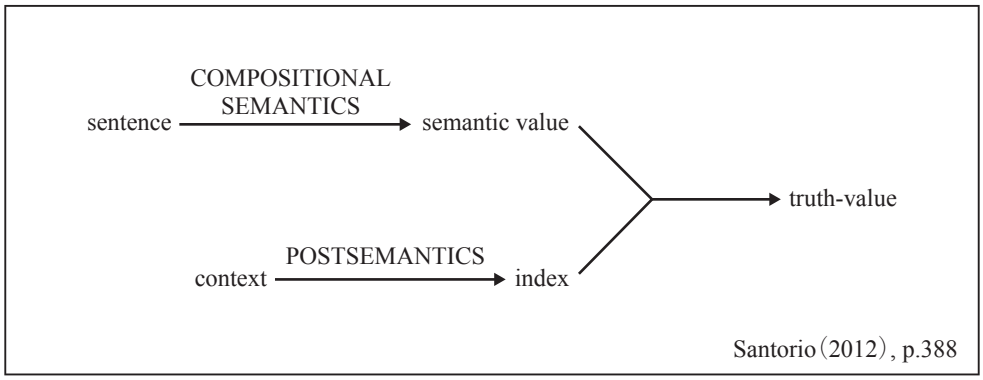
（2a）もしコインが裏なら、リンゲンスはスタンフォードの中央図書館にいる。
（3a）もしコインが表なら、リンゲンスはハーバードのワイドナー記念図書館にいる。

しかし、（3a）は明らかに誤った解釈である。もしコインが表なら、生き残っているのはラウベンであり、リンゲンスではない。ラウベンが生き残っている場合も同様の仕方で（2）の解釈が誤ったものとなる。この議論が意味することは、「私」の意味論的値としてリンゲンスあるいはラウベンのどちらを指示対象としても、（2）と（3）が同時に真となることはない。にもかかわらず、（2）と（3）の発話は問題なく同時に真なのであり、私たちのこの言語的直観をカプラン的意味論は説明することができない。

サントリオの議論を提示したのは、この議論を検討するためではなく、そこから引き出される新たな意味論的枠組みが興味深いからである。サントリオは次のように主張する。

> 意味と文脈の相互関係は（中略）ポスト意味論的レベルで起こる。文脈からのいかなる入力も合成的意味論を実行するために必要ではない。それゆえ文脈パラメータは、少なくともその理論の合成的部分には余分である。私たちはただ、合成的意味論を指標（index）と割り当て（assignment）を用いて実行するだけだ。全体的な理論はポスト意味論的レベルでのみ文脈と接続する。[7]

以下の図がサントリオの提示した描像である。[8]



サントリオの議論は、指示および真理値評価についての直観や理論的予測を保持しつつも、それが狭義の意味論の研究対象には属さず、むしろポスト意味論的レベルで説明すべきであることを示している。

---

7 Santorio（2012）, p.387.
8 この描像は文だけでなく他の表現にも拡張可能である。他の表現についての議論は Santorio（2012）を参照。

内在主義は、サントリオの立場と親和的である。先にも述べた通り、内在主義者は、指示の概念や語と世界の関係が意味論には属さないと主張する。次節では、内在主義に対するいくつか批判に対して応答することでこの立場の擁護を試みる。

２．意味論的内在主義に対する批判と応答

本節では、内在主義に対する批判を検討し、それらが説得的でないことを明らかにする。

２－１．クリプキによる意味についての個人主義批判

クリプキは『名指しと必然性』において、記述主義に対する批判だけでなく、意味理解の個人主義に対する批判も行っている。その批判は記述主義的言語観に基づく意味論に対するものであり、内在主義に対する批判として妥当かどうかは定かでない。しかしクリプキの議論は、前節で言及した二種類の理論の区別を導入するのにうってつけである。

クリプキの個人主義批判は次の通りである。

> 記述群理論へと導く見取り図は、次のようなものである。ある人が一人きりで部屋にいる。他の話し手たちの集団やその他一切のものは消えてもかまわない。そして、「『ゲーデル』によって私は、誰であろうと算術の不完全性を証明した男を意味することにする」と言うことによって、自分自身のために指示対象を決定する。（中略）もしそうするのなら、シュミットが算術の不完全性を発見したとすれば、「ゲーデルはしかじかのことをした」と言う時、実はシュミットを指示していることになる。
>
> だが、われわれのほとんどは、そんなことはしていない。誰か、例えば一人の赤ん坊が生まれたとしよう。その両親は彼をある特定の名前で呼ぶ。両親は、彼のことを友人たちに話す。他の人々が彼に会う。様々な種類の会話を通じて、その名前は結節点から結節点へとあたかも鎖のように広がって行く。この連鎖の末端にいて、市場かどこかでたとえばリチャード・ファインマンのことを聞いた話し手は、たとえ最初に誰からファインマンのことを聞いたのか、あるいはいったい誰からファインマンのことを聞いたのかさえ思い出せないとしても、リチャード・ファインマンを指示することができるだろう。（中略）最終的にその人自身に達する一定の伝達経路が、その話し手に届いているのである。だとすれば、たとえファインマンを一意的に同定できないとしても、彼はファインマンを指示しているのである。（中略）ファインマン自身に辿り着く伝達の連鎖は、彼が結節点から結節点へとその名前を受け渡す共同体の一員であることによって確立されたのであって、彼が自分の書斎でこっそりと、「『ファインマン』によって私は、これこれしかじかのことをした男を意味しよう」という儀式を行うことによって確立されたわけではない。[9]

[9] Kripke（1980）, pp.91-92（108-109 頁）.

応答：

クリプキのこの考察は、指示についての説得的な議論を提供しているように思われる。しかし次の二点を確認すればクリプキの議論が内在主義の批判にはなっていないことが分かる。第一に、クリプキによる指示についての議論が意味についての議論でもあると主張するには、「名前の意味はその指示対象である」という独立のテーゼを擁護しなければ成り立たない。さらに言うと、良く知られていることだが、クリプキは名前の指示を決定する仕方についての考察はしているが、指示対象が名前の意味である、とは言っていない。クリプキの議論がたとえ指示の正しい理論を導く良い見取り図を与えているとしても、指示の理論が意味の理論に直結することは無いのである。

第二に、クリプキの議論はメタ意味論的レベルでの個人主義（内在主義）批判にはなっているが、本稿で問題にしている内在主義の批判にはなっていない。内在主義は、単独の個人が誰の助けも借りずに意味を獲得したり、個人が好き勝手に意味を作り出すことができる、という超個人主義的見解にコミットしてはいない。前節でも述べたように、本稿では、言語を使用する主体としての個々の人間が理解しているところの意味そのものを問題にしており、意味が生成されるプロセスを問題にしていない。私たちが言語をどのように獲得するのか、という問題は言語研究の重要な問いであり、先にも述べたように、その問いに答えるには内在的要因だけでなく外在的要因をも必要とするだろう。しかし、意味の基礎づけなどのメタ意味論的レベルでの外在主義は、ウィクフォシュが指摘するように、意味論的外在主義を必ずしも支持しない[10]。メタ意味論的レベルの外在主義が意味論的外在主義を支持するのは、外在的要因が語と対象の意味論的関係を基礎づける時だけである。そして、少なくとも意味論的内在主義はそのような関係にコミットしておらず、メタ意味論的レベルでの外在主義を他の仕方で構成する道が残されているのである。

２－２．双子地球論証

パトナムは、意味についての次の二つの伝統的テーゼが同時には成立しないと主張した[11]。

（4）意味を知るとはある種の内的状態である。
（5）意味は外延を決定する。

（4）と（5）が同時に成立しないことを示すために、パトナムは双子地球の論証を考案した。その論証はおおよそ次のようなものである。

双子地球のシナリオ：

宇宙のどこかに「双子地球」と呼ばれる天体がある。双子地球はほとんどの点で地球と同じであり、そこには私の正確に同じ複製――物理的にも心理的にも同じ複製――もいれば、通天閣の正確に同じ複製もあるし、さらには私たち自身の歴史をも正確になぞられている。地球と双子地

[10] Wikforss（2008）を参照。
[11] Putnam（1975）を参照。

球が異なる唯一つの点は、「水」と呼ばれる物質の化学的構造が異なることである。地球では無色透明な私たちののどを潤す液体は H_2O という組成を持っているが、双子地球では、無色透明で双子地球の住人たちののどを潤す液体はより複雑な構造を持っている。その複雑な構造を省略して XYZ としよう。ここで、1750 年以前に地球人オスカーと双子地球人双子オスカーを登場させよう。双子オスカーはオスカーの正確な複製であり、「水」と呼ばれるものに対する二人のオスカーの心理的態度は全く同じである。のどが渇いた時にのどを潤したい欲求、シャワーを浴びる時に感じる感覚、海を眺める時の視覚的情報など、オスカーと双子オスカーは全く同じ知覚として受け取るのである。また、1750 年の地球ではまだ水の化学組成は明らかになっておらず、このことは双子地球でも同様である。つまり、オスカーと双子オスカーは「水」と呼ばれるものに対して心理的に異なる態度を示すことは無い。この時、オスカーと双子オスカーがともに「水が欲しい」と言ったとしよう。オスカーと双子オスカーは「水」に対して同じ心理的な態度を示すので、当の文を言った時にも彼らの心理的な状態は同じである。しかし、地球では「水」によって指示される物質は H_2O であり、双子地球では「水」によって指示される物質は XYZ である。つまり、オスカーは H_2O という液体が欲しいと主張し、双子オスカーは XYZ という液体が欲しいと主張しているのだから、その内容が異なっている。つまり、「水」についての心理的な状態が全く同じであるにも関わらず、オスカーが使う「水」と双子オスカーが使う「水」の外延は異なっているのだ。

双子地球の論証からパトナムが引き出した教訓は、(4) を否定することで (5) を守ること、すなわち「意味は頭の中に無い」と認めることであった。応答に入る前に、次の二点を確認しておく。第一に、パトナムの議論は基本的には、意味論的値が外在的要因によって決定されるというメタ意味論的外在主義を擁護する議論である。従って、パトナムの議論が必ずしも内在主義と不整合をきたすのかどうかは明らかでない。しかし第二に、パトナムはテーゼ (4) を放棄しテーゼ (5) を擁護することによって、指示を意味論的概念と見なしている。これは本稿の内在主義が否定する見解である。

応答：

双子地球の論証を額面通りに受け取ると、ウィクフォシュの言うところの物理的外在主義が帰結する。ところが、もしこれが正しければ、意味は私たちの知識を超えた存在であることになってしまうのだ。例えば、物理的外在主義によれば、1750 年以前すなわち水の組成がまだ明らかにされていない時代でさえ、オスカーは「水」によって H_2O を意味していることになる。また、外在主義者は、ある一人の人物がある語を一定の仕方で変わりなく使用しているにも関わらず、その語の意味が異なりうることを認めなければならない[12]。しかし、ここで重要なのは外在主義

[12] オスカーが知らないうちに双子地球に転送され、知らないうちに地球に戻された、という事例を考えればこの点は明らかである。ファーカスも類似の指摘をしているが、ファーカスはより主観的な用語（「反省」など）を使用し、認識論的な観点から説明している。Farkas (2006), p.388 を参照。

的な意味論が正しいかどうかではなく、内在主義者がテーゼ（5）を認める必要はない、という点である。1 － 5 節でも述べたように、外延は合成的意味論のレベルでは現れず、ポスト意味論のレベルで文脈を伴って決定されるものだと考えることができ、従ってテーゼ（5）を認める必要はない。私たちが理解している語が実際に何を指示するのか（いかなる外延を持つのか）、という問題は意味論の問題ではなく、それゆえ 1750 年以前の人々が「水」によって H_2O を意味していたという帰結を受け入れる必要は無いのである。

２－３．意味の社会的側面

実際のところ、パトナムは物理的外在主義的見解を支持していたわけではない。パトナムが支持していた見解は、社会言語仮説に基づく社会的外在主義的見解であり、その攻撃対象は個人主義的言語観にあった。

> 言語的分業というものが存在する。もし楡の木やアルミニウム金属を認識する仕方を得ている人がいなければ、私たちは「楡」や「アルミニウム」などのような語をなかなか使うことができないだろう。しかしその区別が重要だと思うすべての人がその区別をつけられねばならないとは限らない。[13]
> ある語が言語的分業に晒されている時はいつでも、その語を習得している「平均的な」話者はその語の外延を規定するいかなるものも得ていない。（中略）その話者が属する言語的集合体の社会言語的状態のみがその外延を規定するのである。[14]

パトナムの社会的外在主義は、先の物理的外在主義とは異なる帰結を生むことが分かっている[15]。物理的外在主義は、1750 年以前の人々でさえ「水」によって H_2O を意味している、という帰結を持つ。それに対して社会的外在主義によれば、1750 年以前には水の組成を知っている専門家はいないため、「水」によって H_2O を意味することは帰結しない。しかしいずれにせよ社会的外在主義は、意味は個々の人間の内的状態によって決定されず、社会的共同体が意味の決定に不可欠に関わっている、という帰結を持つ。問題は、社会的外在主義が妥当な立場かどうかである。

応答：

社会的外在主義は、言語の「正しい」意味こそが意味論の研究対象だと考えている。すなわち、社会的状態あるいは専門家集団こそが意味決定の不可欠な要因であり、それらが個人の使用する言葉に意味を与える。しかしながら、この見解は意味を誤って理解していることを説明しない。この点は重要である。社会的外在主義は、言葉を誤って使用しているはずの個人が実は正しい意

---

13 Putnam（1975）, p.144.
14 Putnam（1975）, p.146.
15 Wikforss（2008）, p.164 を参照。

味を理解している、という帰結を持つ。これは、言い間違いなどのいくつかの事例をうまく説明できるが、人間のそもそもの言語能力がいかにして機能しているかを説明できない。コリンズの反論を引用しよう。

> 言語の社会的側面が意味論的内在主義を掘り崩すという主張に特有の誤りは、私たちの直観の内容と直観そのものとを混同していることである。（中略）言語理論も科学の他の部門も、（意味も含まれる）いかなるものであろうともそれについての誰かの直観を証明するよう義務付けられてはいない。説明されるべきは、私たちが持つ直観がいかなるものか、なぜこれらの直観であり他の直観ではないのか、直観がどのように私たちの行動やより広い認知を形作るのかであり、それらのどれもその直観が真であることを前提しない。同様に、説明されるべきは、私たちが意味していることに関する私たちの意図をどのようにして持つことができるのかであり、しかしそのような意図の成功あるいは失敗は私たちの意味論的能力にとって構成的でない。もしそうであったなら、そもそもいかにして私たちが何かを意味することができるのか、ということを見るのは困難であろう。[16]

ここでのポイントは、社会的外在主義は私たちの言語能力そのものの説明を不可能にする、ということである。私たちは正しい言語使用ができるから何かを意味することができるのではなく、何かを意味することができるからこそ、ある人の言語使用の正しさを問えるのである。さらに言えば、個人主義的な言語能力に基づく意味論の構築は、言語の社会的側面を排除しない。より大きな枠組みとしての言語理論は、言語の社会的・規範的側面を説明できるかもしれない。いずれにせよ、内在主義者は、社会的外在主義を支持することなく、個人主義的な意味の研究と言語の社会的側面の研究を（異なるレベルで）維持することが可能なのである。

２－４．真理条件

内在主義は、意味論の真理条件的性質を説明できない、という議論がある。「「S」が真 iff S」という真理条件を表す文、いわゆる T―文は、右辺が世界についての実質的な関わりがなければそもそも真理条件文とはみなせない。ボーグは、この理由から真理条件についてのミニマリズムを批判している[17]。実質的な真理条件の擁護は、レカナティが言うように、真理条件が言葉と世界を結ぶ役割を果たすという直観に基づいている。

> 真理条件的意味論の中心的な考えは、（中略）真理を経由して、私たちが語と世界を結びつけるからである。もし私たちが文の真理条件を知っているなら、私たちはその文が真であるためにいかなる事態が成り立たねばならないかということを知っている。そしてそれが意味するのは、私たちはその事態を特定することができる、ということである。T―文がその意

[16] Collins（2009）, pp.64-65.
[17] Borg（2009）, p.35 を参照。

味で真理条件の知識を表すのは、その双条件文の右辺が使用されている、すなわち、それが主張する必要十分条件がその T―文の発話者にとって透明なときのみである。[18]

応答：

第一に、十全な真理条件は意味論の枠内では説明できないことが受け入れられつつある。十全な真理条件には語用論的要素が不可欠だと主張する立場は「真理条件的語用論」と呼ばれる。従って、そもそも真理条件的性質が意味論的性質だと考えるべきなのかどうかは明らかでない。

第二に、真理条件とは独立に意味論を構築する立場が可能である。例えば真理のミニマリストであるホリッチは、後期ウィトゲンシュタイン的精神のもと、意味を使用的性質（use property）と考え、真理条件的意味論を批判している[19]。

第三に、コリンズが述べるように、真理条件は外在的なものを前提しない。

> その［意味論的理論の］主要な関心は、言語の構造的あるいは合成的特徴にあるように思われる。それゆえ、多くの研究は量化や動詞、代名詞の捉え方、副詞、使役動詞、問い、一般名詞などの解釈に関してなされる。このうちのどれも外在的関係を含んでいない。というのも、その分析は私たちが指示的性質をどのように措定しているかとは独立に成り立つからである。（中略）例えば、(6) における事例を比較せよ。
>
> (6) (a) ビルは何時間も泳いだ。
> (b)* ビルは何時間も到着した。
>
> なぜ私たちは持続を持つ到着について話せないのだろうか。結局のところ、いかなる世界の出来事も何らかの時間を持つ。世界の何ものも、幾ばくかの時間にわたって延びている到着を排除するものは無い。しかし、ある意味で、持続を持つ到着という考えそのものはばかげている。というのも到着は単なる終結の一つだからである。このことは、私たちがどのように世界を見ているかの側面であっても、私たちが思索している世界の側面ではない。[20]

これらの指摘はどれも決定的ではないが、真理条件が内在主義の困難を明らかにすると断定するのは早計であることは示せているだろう。

３．意味論的内在主義の帰結

それでは最後に、内在主義を支持することによる二つの帰結を明らかにする。

---

18 Recanati (2003), pp.92-93. 強調は著者による。
19 Horwich (1998) を参照。
20 Collins (2009), pp.66-67. 強調は著者による。［ ］内は引用者による。

３－１．語用論に属する指示の概念及び真理条件的性質

「これ」や「あれ」、「太郎」や「花子」、「私」や「あなた」などの指示的役割を有する語は、それらが実際に何を指示するのかを知ること無しに理解される機能――例えば、「これ」は近いものについて語る時に用いられる機能を持ち、「太郎」は行為主や作用を受ける対象のタグとして機能し、「私」は話し手や書き手を表す時に用いられる機能を持つなど――が意味論的性質であり、それが語用論的性質と結び付くことによって、「語を用いて対象を指示する」という現象が説明される。指示対象は意味論的性質に指示的作用が加わることで決定されるが、それはポスト意味論の話である。指示対象がポスト意味論のレベルで決定されることに対応して、真理条件的性質もまた語用論的性質に属することになる。

これは指示についてのこれまでの研究に疑問を呈するものでは全くない。この主張が否定するのは、その研究が意味論に属するということだけである。言い換えると、意味論と指示論は異なる現象を説明する理論である。指示と真理条件の理論が意味論に属するという前提が、「意味論的関係」にまつわる哲学的問題を引き起こしてきたのであって、その前提さえ放棄すれば、「私たちはいかにして語と対象の緊密な関係を構築できるのか」という問題は消え去る。環境や状況に応じて揺らぎやすい指示を抜きにしても理解される、不変の意味論的値が説明されねばならないのである。

もちろん、意味特性と内容の区別に基づくカプラン的意味論によってその揺らぎを統一的に説明できる、と考える人もいるだろう。しかしサントリオの議論が示したように、私たちは指標詞を、現実に固定されている指示対象を顧みずに理解している。もしこれが正しいなら、カプラン的枠組みを支持する理由はもはやなくなるだろう。

３－２．意味論と懐疑論

外在主義の擁護の背景には、世界の存在についての懐疑論を解決するという目的があった。「水槽脳の懐疑論」の解決のためにパトナムがとった意味論的アプローチがその典型例である[21]。それに対して内在主義者は、自身の構築する意味論には懐疑論を解決する力がないと自覚しているだろう。しかしこれは、懐疑論的問題の解決あるいは解消を図る外在主義的精神を放棄すべきだ、ということを必ずしも意味しない。懐疑論的問題は指示論や他の非意味論的領域も総動員して解決あるいは解消すべき問題だと考えることができるはずである。それゆえ、内在主義は伝統的な哲学的考察を必ずしも否定するものではない。

おわりに

本稿では、意味論的内在主義の基本的な立場を確認し、内在主義に対する批判に応答し、さらに内在主義の持つ帰結を確認した。こうしてみると、意味論的内在主義を批判する意味論的外在主義者が守りたいものは、指示についての直観に尽きるように思われる。私が本稿で提示した内

---

[21] Putnam（1981）, Ch. 1 を参照。

在主義は、意味論的値が外的対象や世界などの外的事物であるという立場を否定しつつ、指示とそれに関連する概念をポスト意味論的（あるいはより広く語用論的）概念として認める、というものであった。この立場は言語哲学において主流の立場ではない。しかし、意味論を指示論とは独立に構築することで、指示の外在的特徴を守りつつも意味論に過度な形而上学的負担を課さないという、哲学的に興味深い立場が可能になると思われる。

（なかそねかつひと　哲学哲学史・博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC）

参照文献

Borg, Emma (2009), “Must a Semantic Minimalist be a Semantic Internalist?”, *Proceedings of Aristotelian Society Suypplementary Volume*, LXXXIII, pp.31-51.

Burge, Tyler (1993), “Concepts, Definitions, and Meaning”, *Metaphilosophy*, 24, pp.309-325.

Chomsky, Noam (2000), *New Horizons in the Study of Language and Mind*, Cambridge University Press.

Collins, John (2009), “Methodology, Not Metaphysics: Against Semantic Externalism”, *Proceedings of Aristotelian Society Suypplementary Volume*, LXXXIII, pp.53-69.

Farkas, Kathlin (2006), “Semantic Internalism and Externalism”, in *Oxford Handbook of Philosophy of Language* (Lepore, Ernest and Barry C. Smith eds.), Oxford: Clarendon Press, pp.323-340.

Horwich, Paul (1998), *Meaning*, Oxford University Press.

Kripke, Saul (1980[1985]), *Naming and Necessity*, Blackwell Publishing.（八木沢敬・野家啓一訳，『名指しと必然性』，産業図書.）

Putnam, Hilary (1975), “Meaning of ‘Meaning’”, *Minnesota Studies in the Philosohy of Science*, 7, pp.131-193.

――――――― (1981), *Reason, Truth, and History*, Cambridge: Cambridge University Press, Chapter 1, pp.1-21.

Recanati, François (2003), *Literal Meaning*, Cambridge University Press.

Santorio, Paolo (2010), “Modals are Monsters: on Indexical Shift in English”, *Proceedings of SALT* 20, pp.289-308.

――――――― (2012), “Reference and Monstrosity”, *The Philosophical Review* 121, pp.359-406.

Stalnaker, Robert (1997), “Reference and Necessity”, in Stalnaker (2003), pp.165-187.

――――――― (2001), “On Considering a Possible World as Actual”, in Stalnaker (2003), pp.188-200.

――――――― (2003), *Ways a World Might Be*, Oxford: Clarendon Press.

Wikforss, Åsa (2008), “Semantic Externalism and Psychological Externalism”, *Philosophy Compass*, 3/1, pp.158-181.

Toward Semantic Internalism: Examining the Concept of Reference

Katsuhito Nakasone

Semantic internalism, which claims that meanings are internal states and that semantic theories aim to explicate semantic ambiguity, i.e., the functions of vocabularies in relation to word-world relations, has been discarded as inadequate in the philosophy of language. But in terms of the connection between philosophy of language and linguists' work, semantic internalism has been taken seriously. Noam Chomsky, the most famous of linguists, has promoted internalist approaches to linguistic phenomena, and the work of his successors such as Pietroski and Collins follows the same line.

The aim of this paper is to show that semantic internalism is worth defending and that criticisms based on semantic externalist arguments are not persuasive. This paper proceeds as follows. First, I explain a central principle of semantic internalism, namely, that meaning is a kind of internal/mental state, and offer an intuitive and theoretical justification. The theoretical justification is grounded in recent works by Santorio, which show that indexicals and other referential expressions are non-rigid and that reference and truth-values are post-semantic conceptions. Second, examining the classic criticisms of semantic internalism, I show that none of these is persuasive. In particular, I examine Kripke's attack on individualism, Putnam's attack on semantic internalism and individualism, and the attack from truth-conditional semantics. Third, I examine two consequences of semantic internalism. On the concept of reference, I claim that it is a post-semantic conception; thus, it is not part of semantic theory proper. Furthermore, contra middle Putnam, semantics does not have the power to resolve skeptical problems; nonetheless, we need not abandon the attempt to resolve these problems because referential properties are preserved in another area of study.

「キーワード」
言語哲学、意味、意味論的内在主義、指示、意味論的関係